

延安の経済危機はアヘン栽培で救われた

— 陳永発「赤い太陽の下に咲いたケシの花」を読む

矢吹晋 (二一世紀中国総研ディレクター)

陳永発教授 (台湾中央研究院) が一九九〇年に発表した「赤い太陽の下に咲いたケシの花」¹⁾は、衝撃的な論文だ。陳永発教授は近代史研究所所属の実績の豊かな研究者であり、「中国共産革命七〇年」²⁾は、上下巻一〇九九ページの大作である。

私は二〇〇一年一月に旧友戴国輝の告別式のため、台北を訪れた際に本書の評判を聞いて、三刷を早速買い求めたが、当時は日本で、追悼会をどう開くかなどの諸事に忙しく、繙くに至らなかった。二〇〇八年夏に東洋文庫から派遣されて中央研究院に二週間滞在し、この間陳教授とは会食を含めて二回、長時間面談する機会があったが、台湾の「原爆の開発断念」に際しての呉大猷院長の蒋介石・蔣経国父子への勧告など、出版されたばかりの『追求卓越——中央研究院一九二八—二〇〇八年』の注目すべき話題に話が咲いて、陳教授ご自身の研究テーマには話がいかなかった。「共産革命七〇年」の副産物として「ケシの花」もすでに発表していたのだが、ここにも話題がいかなかった。その後、畏友小林弘二教授から「延安のアヘン政策」を教えられたが、今回ようやくこのテーマを扱う機会を得た次第

である。小林さんはかつてマーク・セルデンの『延安革命』³⁾を訳したこともあり、いわゆる「延安モデル」に対して全面修正を求める陳永発教授の分析は、研究の一大深化を意味するものとして注目されたであろう。

陳教授曰く、「セルデンの研究によれば、一九四〇年代に中共は陝甘寧辺区は空前の経済危機に直面したが、政権は崩壊するどころか、逆に大衆路線の原則に基づいて、一連の発展戦略を創造した。すなわち減租減息 (租税と利息の引き下げ)、知識分子の下放、大生産運動などである。中共は農民の生産への積極性を動員し、陝甘寧辺区をして千年来の貧しく後れた桎梏から解放し、繁栄に向かわせた」。この延安モデルは、その後文革期に「大寨経験」の先例とされたが、大寨経験の破産は今日誰でも知っている。大寨の農業大増産の奇跡は国家の大量の財政支援の賜物であり、財政支援なくして大寨の奇跡はありえなかったのだ。「大寨経験における財政支援」に相当する秘密兵器が、「延安経験においてはアヘン取引であった」と陳教授は必ず指摘する。曰く、「もし当時中共がアヘンの栽培禁止、流通禁止を全面的に行っていたとしたら、いわゆる延安経験なるものは空中楼阁であつたらう。もし中共がなんらかの発展戦略を採用しようとするれば、資金不足の問題に直面した。資金は辺区の外からは来ないならば、辺区内部で調達せざるを得ないが、これは痴人の夢に等しい」。言い換えれば、「もし

一九四〇年代に延安の奇跡が創造できたのなら、一九八〇年代にその延安奇跡をなぜ再現できないのか。陝甘寧辺区は今日なお中国大陸で最も貧しい後れた地区にとどまっているのはなぜか」という疑問になる。とはいえ、延安期にアヘンを大量に栽培し販売して財政に貢献したことを実証することが論文の主な目的ではない、と陳教授は慎重に話を進める。

第一にアヘンを栽培し販売するに至った環境を説明し、第二に延安におけるアヘン経験は孤立した事件ではなく、歴史的脈絡をもつことを明らかにする。延安のアヘンはそれ以前のアヘン問題とどんな異同があるのか、それを知って初めて陝北の経済危機に導かれて「アヘン反対」を主張していた中共がなぜアヘン取引に追い込まれたか、その理由が分かる。第三にアヘン取引は資金蓄積を速やかに行う道ではあるが、高額の利潤は人々をアヘン中毒者に変えることによって支えられるだけではなく、関係者に対して汚職腐敗の合併症をも引き起こす。

陳教授の用いる主な資料は「大陸で八〇年代に出版されたもの」であり、それを中心として国民政府側の情報で補う方法をとる。というのは、アヘン取引は「中共史上最大の機密事項」であり、陳教授が用いる資料はすべて「中共から無意識のうちに漏れた」ものだからだ。しかも用いる資料は「史料集として編集された原始文件」に依拠する。しかしその「原件」自体には接触できないので、「原件」の信憑性自体の判断は難しい、

とここでも陳教授は慎重だ。陳教授の読んだ「中共の原始文件」には、①幹部の教育水準の低さ、②弊制の混乱、③物価の激しい変動などを反映して、史料自体の数字の間違いもある。とはいえ、全体としていえばこれらの数字は延安の経済状況と一致している。このような前提のもとに陳教授がセルデンの提起した延安経験にアヘン取引の数字をもって挑戦した論文が筆者の紹介する論文である。結論を含めて八節からなるが、筆者はここで前半の三節までを紹介する。すなわち国民政府の経済封鎖のもとで、「アヘン栽培以外に財政赤字克服の手段は見当たらない現実」を描いた部分である。

「一九四一〜四三年延安の経済危機」

一九四一年、中共官方の資料によると、延安の粟価格は三六%値上がりした。四〇年の値上がり五〇%と比べると値上がり幅は減ったものの、三九年の値上がり八%と比べると猛烈だ。四二年の値上がり幅は一二九%、四三年の値上がり幅は一〇七%であり、そのインフレぶりは人を驚かすに十分だ。国民政府支配地区と比べて陝甘寧辺区のインフレはこれをはるかに上回る。ここで陳教授は『陝甘寧革命根据地史料選輯』に基づいて、四一年と四二年の状況を次のように描いている。四一年に延安の物価は五倍値上がりしたが、西安の物価は三七倍であった。四二年に延安の物価は一五倍になったが、西安は七・

表1 陝甘寧辺区の歳入と歳出 (単位は「辺区元」)

	収入	没収額	銀行借入	塩税と企業収
1935年12月	16万8,694元	8万7,364元 (51.8%)		
1936年	118万7,227元	65万2,858元 (55.0%)	119万4,016元	5万7,775元

	支出	軍費	糧食	行政費
1925年12月	14万6,150元	13万3,172元 (91.1%)		
1936年	232万1,606元	134万3,680元 (57.9%)	10万5,663元 (4.5%)	7万5,281元 (3.3%)

資料出所 『星光』27、31頁。数字に誤りあり。単位は「ソビエト辺区紙幣」(中華ソビエト国家銀行西北支店発行)、『陝甘寧革命根据地史料選輯』5輯5頁。『辺区紙幣』と「法幣」の交換レートは6対1が公定レート(官価)。ちなみに1米ドル=7法幣元である。

八倍であった。このように重大なインフレについてセルデンは「国民党が経費提供を停止し、経済封鎖を行ったため」としている。この指摘が間違いだというのではないが、陝甘寧辺区経済の「本来の脆弱な体質」に注目している。陝甘寧辺区は、もともと物資が不足していたところに、さらに封鎖が加わったのである。中共の土地革命は、農村の貧農をなくしたとはいえ、単独で中共に食糧を提供できるような新しい陝北をつくることはでき

なかった。もし抗日統一戦線という戦略が成功しなかったら、陝甘寧辺区が「国民党の包囲下で生き延びられたか」疑問であ

る。陝甘寧辺区では三四年に辺区労働民主政府を樹立し土地革命を行った。地主から土地、食糧、牛羊など一切の財物を没収して、富農からは「余分の土地」を没収し、再分配した。

一九三七年九月に中共が土地革命の放棄を宣言するまでの三年(一九三四〜三七年)は貧農の「大翻身」時代であり、およそ六〇万の農民が土地を獲得した。土地を得た農民がただちに生産力を上げたかどうかは実証しにくい。陝甘寧辺区は外敵に対する対応に忙しく経済建設に取り組むことができたのか、戦争状態のなかで土地を分配された農民がその土地を十分に利用できたのかも大きな問題だ。三五年一〇月、中共中央は二・五万里の長征を経て、陝北に到達した。軍隊と幹部の数は六〇〇〇〜七〇〇〇人であり、糧秣を携帯せず、現地調達するほかなかった。このとき陝甘の現地ゲリラは長年土豪・地主と戦い尽くしていたので、もはや彼らにはしぼられる財力も物力もなかった。中共の統計によると、三五年一二月、陝甘辺区の収入は、一六万八六九四元(単位はソビエト紙幣)で、うち地主と土豪は八万七三六四元、収入全体の五二%であった。翌三六年、陝甘辺区の没収収入の比率は、以前とほぼ同様であり、辺区の歳入歳出は表1のごとくであった。明らかに土豪を倒し地主から没収した収入は、中共中央の紅軍が到着後は支出をまかなえなくなっていた。到着した数千に地元の軍隊を加えて一万前後の軍隊を給養することは、差し迫る現実問題であつ

た。三六年八月までに中共中央は時局をにらんで現実には合わない「反蔣抗日」政策を放棄し、「逼蔣抗日」のスローガンも、「全国は一致して銃口を外に向けよ」と改めた。

このとき、内蒙自治軍が日本軍に鼓舞されて綏遠に侵攻した。中共は晋綏軍の抗日を支援するスローガンのもと、寧夏の銀川を奪取する計画を立てた。しかし国民党軍の守りは硬く、中共は二カ月足らずでこの計画を放棄した。一〇月ごろ紅二方面軍と紅四方面軍が会合し、さらに紅一方面軍も加わり、およそ三万の軍馬に膨れた軍が定辺付近に集まった。紅二方面軍と紅四方面軍は食糧を欠く松潘高原を越えてきたので、兵士はボロを着て、栄養不足の顔、冬を迎えて問題に直面していた。そこで中共中央はまず安辺と漢中を攻略し食糧を得ることを考えた。しかし計画が決まる前に西安事変が発生し、情勢が変わり、別の解決策を考えることになった。西安事変の前、国民党府は陝北で経済封鎖を實行していたが、一九三六年四月ごろ、中共は張学良や楊虎城とそれぞれ秘密の停戦協定を結び、封鎖は緩くなっており、また西安事変以後は国民党府が正式に封鎖を解除したので、中共の受ける制裁圧力は激減した。当時陝甘寧辺区の人口は多く見ても六〇万であった。

幸いにも一九三七年春、コミンテルンから「鉅款」が届いた。それも尽きたときに、盧溝橋事変と八一三淞滬戦争が起り、中共にとって転機が訪れた。国民政府は日本軍の侵略に抵

抗するため、中共の起草した「共に国難に赴く」宣言を受け入れざるをえなかった。この宣言に基づき中共は建前としては国民政府の領導を受け入れたが、実際には独立自主と行動の自由を保持した。国民政府は虚名を得て代わりに陝甘寧辺区と三万の共産党軍に糧秣を提供した。この経費を国民政府は西安で法幣（国民政府の法定紙幣）の形で支払い、中共は一部を物資に変え、残りの現金を延安に運んだ。三万の共産党軍は国民革命軍第八路軍に改編され、晋北やその他の戦区で作戦に従事した。中共中央は国民政府からの軍費を行政費に変えて、陝甘寧辺区は税を安くし、民を休息させることができた。辺区政府主席林伯渠によれば、三七年から三九年にかけて毎年食糧一二万石、錢一三〇〇万元を必要としたが、その大部分は外界からの援助によるもので、庶民は納税を免れた。一九三七年以後、辺区農民の財政負担は主として救国公糧であった。その徴税は一定の収穫量を上回る部分について累進的に増やしたので、貧しい農民には極めて有利であった。

表2は三七年から四〇年までの救国公糧の割当と実際の納税額である。

救国公糧は農民が収穫量を自ら申告して公議で審査したのでに徴集した。農民の負担は重くないので大いに歓迎された。概して目標の一月前に徴税は完了し、一部の地区では三〇五日で完了した。一九三七〇年に辺区の食糧生産量は一一〇万石

から一六〇万石に増えた。しかし人口は六〇万人から一三〇万人に増えたので、農民の生活が際立って改善されることはなかった。辺区経済は自給自足ではなく、多くの物品を「外界からの移入」に依存した。「農産物を移出し、工業品を移入した」ので、交易は辺区に不利であった。辺区の毎月移入額は移出額の七五％程度であった。

一九三八年末に武漢を失い、抗戦は第二段階に入った。一方では日本は「速戦即決」の不可能なことに気づき、占領区を固め、敵後方の掃蕩工作を強めた。三九年の中共の歳入のうち、国民政府からの「協款」は八九・七％に達して、その他の同情募金を加えると外部からの支援は八九・九％に達した。四〇年には国民政府からの「協款」は七三・五％に達した。¹⁵

表5は、「陝甘寧辺区9年来の財政収支報告」であり、陝甘寧辺区財政庁の資料である。

表3、5を比較すると、国民政府からの資金は西北財經所よりも少なく、他方その他の外援は西北財經所よりも多い。この数字を公表した目的は、中共の友が満天下にいることを顕示すること、国内外の数字には「敵後方の抗日根拠地」を含むこと、である。これらの三表の数字は矛盾するとしても、外援が中共の財政に占める重要性の大きなことが分かる。一九四一年に新四軍事変が発生するや、両党の關係は破滅に瀕した。国民政府からの資金が得られないだけでなく、経済封鎖も行

われた。辺区の財政は空前の危機に見舞われ、辺区政府の赤字は辺区紙幣で一六二・二万元になった。これは当年の税収の三〇・八％に当たる。移出入を見ると、一九四一年上期の入超は約一五〇〇万元で、このために辺区紙幣は暴落した。延安の物価指数を見ると、四〇年一二月を一〇〇として、まる一年後には八八四となった。つまり辺区紙幣は九分の一、一分の一に暴落した。これは中共政權の威信を大いに傷つけた。¹⁶一九四二年に辺区全体のインフレは好転して、物価上昇は四倍余に収まった。四三年にはさらに好転して四倍弱に収まった。¹⁷とはいえ、値上がりしていた基数をもとにした数字であるから、樂觀できる情勢ではなかった。毛沢東は「着る衣なし、食べる油なし、紙なし、おかずなし。戦士に靴下なく、工作人員は冬でも布団なし」と書いている。¹⁸

経済難関を乗り切る

この経済危機をどのように乗り切ったのか。四三年の財政は表6の通りである。表に記された「生産運動」とは、中共中央の呼びかけた野菜と油、塩の自給自足運動であり、多くが目標を達成して節約効果が大きかった。食糧や被服、事務費用の節約も大きかった。それでも財政赤字の三割は残った。一九四三年上期に中共の銀行は二億七六〇〇万元辺区紙幣を発行して自力更生に必要な資金問題を解決しようとしたが、辺区の移出入

表3 西北財經弁事処の総括(単位は法幣)

	国民政府協款	外界義援金	商 税	その他	総 数
1937年10月	華僑中心				
1938年 9月	(41.1万元) x		59.1万元	18万元	118.2万元
1939年	790万元+α				880万元+α
1940年	726万元	30万元+α			151.2万元

資料出所 『陝甘寧革命根据地史料選輯』1輯73~74頁、94~95頁。6輯22頁。単位は法幣。Xは総数から商税およびその他を引いた計算数字。

表4 西北財經弁事処の統計

	歳入総額	外援額	総額に占める 外援の比率%
1937年	52万6,302元	45万6,390元	77.2
1938年	90万7,943元	46万8,500元	51.7
1939年	660万2,909元	564万4,667元	85.8
1940年	975万995元	755万855元	70.5

資料出所 『陝甘寧革命根据地史料選輯』6輯13頁、427頁。6輯22頁。単位は法幣。同書6輯32頁によれば、1948年において、南漢宸の指摘した外援は、1939年の財政支出の87.5%を占め、40年のそれは74%強を占めていた。上の表より少し多い。

表5 陝甘寧辺区9年来の財政収支報告

	国民政府からの資金	国内外の義援金	総 額
1937年7~12月	192万7,672元	3万6,254元	196万3,927元
1938年	448万157元	197万3,870元	645万4,027元
1939年	500万436元	60万4,207元	560万4,643元
1940年	499万7,074元	550万5,901元	1,050万2,975元

資料出所 『陝甘寧革命根据地史料選輯』6輯13頁、428頁。単位は法幣。

赤字の解決には役立たず、インフレをもたらしのみであった。陝北特産の甘草は交通不便で輸送費が高くつき、持ち出せなかった。毛皮は品不足で移出の余力はなかった。塩は日本軍が沿海の産塩地区を占領したので品不足であった。要するに、甘草、毛皮、食塩という陝北の三宝は赤字問題の解決には貢献できなかった。この艱難の局面に直面して、中共中央は外地商人を招き「特産」に責任を負う「土産公司」が市価の二割引で「土産」を扱う政策を容認した。これは土産商人の利益を図るためであったが、同時に、この商売のやり方を学ぶためでもあった。『陝甘寧革命根据地史料選輯』四輯(四三一~四三三頁)には、値下げの結果「価格とコストとの関係は三対一になった」と記す。ということは、四三年にアヘンの新貨を売り出したとき、価格とコストの比は五対一であったことを裏書きする。

土産公司の総経理喻杰の報告によれば四三年一~二月の販売記録は表7の通りであった。四三年中に計九七億二一九六万元の「特産」を移出し、二〇億七二六四元(辺区紙幣)の収入を得たが、これは食塩移出の二・八倍であった。四三年はこの「特産」移出がなければ、赤字は四二年の二倍になったと見られている。四四年と四五年はこの「特産」の移出成功により、長期的入超の局面を一変させることに成功した。

表6 1943年の辺区財政 (単位は辺区紙幣元)

支出総額	5億190 万元	100.0%
収入 (移出入税、塩税、公塩代金など)	1億7,000万元	33.9%(対支出総額比)
財政赤字	3億3,190万元	66.1%(対支出総額比)
小計	5億190 万元	100.0%(対支出総額比)
以下、財政赤字を圧縮するための計算		
生産運動		
節約	1億万元	19.9%
赤字a	7,925 万元	15.8%
(赤字b)	2億5,265万元	40.4%
小計	(1億5,265万元)	(30.4%)
	4億3,190万元	76.1%
	(3億3,190万元)	(66.1%)

資料出所 『陝甘寧革命根据地史料選輯』6輯18～19頁。赤字aは計算ミスなので、計算し直すとbになる。

表7 1943年1～12月のアヘン販売記録

1943年1月	7 億6,712万元
2 月	13 億8,696万元
3 月	6 億8,598万元
4 月	7 億4,718万元
5 月	6 億1,718万元
6 月	8 億1,749万元
7 月	11 億2,749万元
8 月	9 億9,033万元
9 月	8 億7,543万元
10 月	5 億6,360万元
11 月	5 億5,263万元
12 月	5 億8,807万元
1943 年計	97 億2,196万元

資料出所 『陝甘寧革命根据地史料選輯』4輯209～10頁。

一九四三年の「特産」交易については、異なる数字があり、特産を含めなければ赤字は四七億九一一七万元で、特産を含めれば一一億七九二万元という数字から、特産の移出を三六億八三二五万元と計算するならば、移出総額に占める比率は六八・七%になる。

②

数字に異同はあるが、仮に特産交易がなかったとすれば、四三年の財政困難を乗り切れたかどうか疑わしい。四四年の特産移出額は移入総額の四〇・五%であり、四五年は九六・九%であった。辺区政府の財政から見ると、四三年の特産販売から得た収益は歳入の四〇・八%であり、四二年とはほぼ同じである。ここで陳教授は問う。「特産」と呼ばれているものは、いったい何か。その秘密を読むカギは、一九八四年に出版された『謝覚哉日記』に隠されていた。謝覚哉は周知のように、建国初期の五大老の一人であり、林伯渠、董必武、吳玉章、徐特立らと並ぶ大物だ。四〇年代には陝甘寧辺区議会の議長を務めていた。文革期に彼は半身不随の身であったが、日記をソファの下に隠して毎日守り切ったのであった。『謝覚哉日記』の一九四五年一月一日の項に、毛沢東はあるとき自己批判を行い、「中共は歴史上、二度のやむを得ず犯した過ちがある」と発言したことが記されている。一つは、一九三五年の二万五千里の長征の途次、チベット人地区を通り、軍隊が彼らの許可を得ずに勝手に青稞を食べたこと、もう一つは一九四一年の経済危機に際し、やむを得ず「某物」を栽培したことである(『謝覚哉日記』七三四頁)。ここで「某物」とはいかなる植物か。謝覚哉が明記しないのはなぜか。毛沢東はなぜ「某物の栽培」

表8 辺区の移出入額と「特産」の移出額

	移入額	移出額 特産を含まず	差額	うち特産 移出分	特産の差額
1943年	64億7,464万元	25億2,485万元	39億4,979万元	20億7,164万元	18億7,815万元
1944年	159億6,016万元	91億7,039万元	67億8,977万元 (67億8,977万元)	224億2,107万元	156億3,129万元 (156億3,129万元)
1945年	20億2,732万元	10億6,655万元	9億6,077万元	39億9,137万元	30億3,060万元

資料出所『陝甘寧革命根据地史料選輯』4輯67～68頁。

表9 1942～43年に「特産」から得た利益

	特産の利益	歳入に占める比率%
1942年	1億3,962万元 (辺区紙幣)	歳入の40.0%
1943年	6,534 万元 (券幣)	歳入の40.8%
1944年	1億3,538万元 (券幣)	財政支出の26.6%を解決
1945年	7億5,799万元 (券幣)	財政支出の40.1%を解決

資料出所『陝甘寧革命根据地史料選輯』6輯17頁、59頁、426～27頁。券幣は辺区紙幣に同じ。

を重大な過ちと述べたのか。『謝覚哉日記』の一九四四年三月一二日の項には、ある座談会についての記述がある。彼は六カ条の「趣語」(ユーモア)を記したが、その四条は「特貨多辺幣少、将来不得了」(特貨が多く、辺区紙幣が少ない、これでは、将来うまくいかぬ)とある。この箇所に謝覚哉が「辺区紙幣を回収し、特貨が下落したら、特貨を買ってもうまくいかぬ」と注記している。この注記によってもいぜん曖昧なところがあるが、当時の含意で「特貨とはアヘンを指した」ので、この座談会とは、「アヘン問題を検討する会議」と

推測してよい。謝覚哉の六条には、「与土共存亡」の文字がある。土とは「領土」を指すから、ここは領土を守ることに存亡がかかるの意だが、この五文字には、ウラの意味がある。すなわち「土」とはアヘンを指し、「アヘンと存亡をともしする」の意になる。すなわち辺区紙幣を回収してインフレを収める、アヘンを低価格で売ることなしには、商人は震えがとまらない、の意である(『日記』五八六～五八七頁、六〇〇頁)。

『日記』の一九四三年一〇月一九日の項には、「黑白両物統銷は疑いを容れない」とある(『日記』五四九頁)。当時の「三大統銷」は、①酒たばこ、②食塩、③「特産」である。②食塩は白色だが、①酒たばこは黒色とはいえない。ここでの黒とは非法、規格品外を意味し、③「特産」を指すことは明らかだ。四三年に辺区のある金融専門家は、辺区財政の解決には「黒」特産、黄、公糧、緑、紙幣、白、食糧の四物に頼ると述べ、さらに「特産」を第一とし、食塩を第四とすると述べた。

土産会社の販売する最大の商品は石鹼であった。その石鹼には二種類あり、一つはホンモノの石鹼、一つはニセの石鹼であった。このニセ石鹼こそがアヘンである。その根拠は三つ挙げられる。第一に、陝北は水不足であり、石鹼を使う習慣はあまりない。第二に、土産会社の石鹼販売量は、あまりにも多すぎる。第三に利潤から見て、陝北では石鹼はもうかる事業ではないはずだが、ここでは大きな利潤をあげている。陳教授は延安

のいわゆる「辺区財政の歳入歳出分析」から、赤字を埋めたものがアヘンである事実、それは石鹼のニセモノの形をとって流通したことを読み解いた。これらの事実は、実は国民政府側、特に反共学者らがつとに指摘していた事実である。

ではなぜ人々は、国民政府側の主張する真実を否定し、逆に中共側の虚偽を信頼したのか、陳教授は二つの理由を挙げる。一つは、国民政府は信頼を失墜していたからだ。国民政府は北伐を開始してすぐに「アヘン禁止」を実行する禁煙機構を設けたが、この禁煙機構自体がアヘン商人の利潤獲得機構に変質した²³。もう一つ、中共は政策としてアヘンを辺区の外部に移出した²⁴が、自らが統治する辺区内部では、アヘン禁止工作を確実に実行した。また一九四三年以降は陝甘寧辺区におけるアヘン栽培を停止し、買いつけと統一販売の対象としたのは晋綏辺区と日本占領区からのアヘンに限定したからであった。要するに国民政府の禁煙機構は、アヘン商人によって骨抜きにされた。中共の辺区では、一定地区での栽培を容認し、辺区の外部に移出して財政の一助とした。ここには禁煙機構を骨抜きにされた国民政府とアヘンを販売しながら、その事実を隠蔽した中共の巧みさが対照的である。中国内外の人々は、その後四〇年にわたって、中共の巧みな政策に騙され続けた。その秘密を確実な史料の解読によって陳永發教授が実証したわけだ。まことに真実を暴く学問の力は恐ろしい。

最後に延安期におけるコミンテルンの援助額を調べる。張沢宇の「全面抗戦時期蘇聯和共産國際対中共的援助研究」(『中共党史研究』二〇一一年八期)を読むと以下の事実が分かる。

陝北に到着して以後、一九三六年六月にモスクワとの連絡が復活した第一通の電報で、中共中央はコミンテルンに毎月三〇〇万円の経済援助を求めた。三六―三七年全面抗戦が爆発する前にコミンテルンは二〇〇万ドル弱(法幣一四〇〇万元)の財政援助をした。全面抗戦の爆発後、中共の財政支出が増加したので、国民政府の資金ではまかなうに十分ではなく、加えて陝北の自然環境は厳しく、資源が乏しく、工農業生産に不利なため、税収少なく、中共財政は緊張した。三九年五月二十五日、中共中央はコミンテルン宛ての電報で、国民党中央政府が毎月五〇〇万元を送金しているが、これは八路军の毎月の軍費支出の二〇%をカバーするにすぎず、インフレの要素を加えると、実質は五〇万元を欠き、財政問題は厳しいと書いた。こうして三八年二月二日、四日、三九年三月五日、五月二五日、中共中央は四次にわたりコミンテルンに電報を送り、財政援助を求めた。三九年六月の電報では、五〇〇万ドルの援助を求めた。

・一九三八年二月一七日、スターリン、モロトフ、コミンテルン議長ディミトロフは五〇万ドル(≡三五〇万元)の財政援助を決定した。

・一九三八年四月二八日、中共中央は三〇万ドル(≡二一〇万

元)を受け取り、毛沢東は領収書を書いた。

一九三八年、王稼祥がソ連から帰国したとき、一部の資金を持ち帰った。

一九三九年六月二十八日と九月二二日の二回、八路軍駐西安弁事処に援助が届いたが、具体的な金額は不明である。

一九四〇年初め、中共中央はコミンテルン宛てに比較詳細な年度財政予算を報告した。そこには以下の記述がある。

毎月の党財政支出(中央と各級機関支出、人員の訓練費、新聞雑誌の印刷出版費など)は七〇万七九六〇元かかるが、収入は三〇万元であり、差し引き四〇万七九六〇元(五万八二八〇ドル)が不足である(一ドル=七元が幣制改革以後の換算レート)。軍隊(八路軍、新四軍、遊撃隊、軍校培訓)の支出は四二〇万元だが、中央政府からの援助は七七万元、軍隊からの収入一三三万元、都合二一〇万元の収入があり、差し引き二一〇万元(=三〇万ドル)が足りない。こうして、中共の毎月の財政赤字は三五万八二八〇ドル(=二五一万元)となる。

一九四〇年二月三日、コミンテルン議長デイトロフはスターリンに指示を仰いだところ、スターリンはこう答えた。「私は多忙で、多くの文件を読みきれないので、君たちが判断して処理されたい。コミンテルンとしては中共に三〇万ドル(=二一〇万元)を援助する」。その後、中共中

央はコミンテルンからの援助を以下のように受け取った。

四〇年五月末、一四・六六万ドル(=一〇二・六万元)および八二〇〇ポンド(=三万九九〇一ドル=二七万九三〇七元)、都合一三〇万五三〇七元を受け取った。一九四一年二月一七日、二・四五万ドル(=一七・二万元)を受け取った。この他、周恩来がソ連から帰国したとき、六万ドル(=四二万元と七五〇〇ポンド=二五万五四六五元)、都合六七万五四六五元を携帯した。四二年二月、ソ連の在華大使パニユーシキンが三万ドル(=二一万元)を携帯した。これらを合計すると、三〇万ドルを超える。

筆者の判断では、ここには以前に送金されていまだに届いていないものも含まれる。一九四一年六月二二日、ソ連はナチスドイツの侵攻を受け、中共の部隊が中国侵略の日本軍を牽制し、日本軍の北上を許さず、ソ連の安全に脅威を与えないようにすることを希望した。このために中共への資金援助を増やした。四一年七月二日、デイトロフはスターリン、モロトフ、マレンコフに対して、中共中央が二〇〇万ドル(=一四〇〇万元)の援助を求めてきた電報を提示した。翌日、ソ共政治局会議は、中共中央に一〇〇万ドル(=七〇〇万元)を援助する決定を行った。七月七日、デイトロフは、電報で毛沢東に知らせ、このカネをただちに送金することを知らせた。九月五日、コミンテルンは中共中央および中共南方局に宛ててそれぞれ

表10 コミンテルンの延安期における資金援助
 (単位は1ドル=法幣7元、1ポンド=4.866ドル=法幣34.062元)

	コミンテルンの対応	中共中央から見ると
1939年6月の電報		500万ドルの援助を求めた
1938年2月17日	スターリン、モロトフ、コミンテルン議長ディミトロフは50万ドルの財政援助を決定	
1938年4月28日		30万ドル (=210万元) を受取り、毛沢東は領収書を書いた
1940年5月末		14.66万ドル=102.6万元および8,200ポンド=3万9,901ドル=27万9,307元、都合130万5,307元を受け取った
1941年2月17日		2.45万ドル=17.2万元を受け取った
周恩来がソ連から帰国したとき		6万ドル=42万元と7,500ポンド=25万5,465元、都合67万5,465元を携帯した
1941年2月	ソ連在華大使館のパニューシキンが3万ドル=21万元を携帯した合計すると、30万ドルを超える	
1941年7月3日	ソ共政治局会議は、中共中央に100万ドル=700万元を援助する決定を行った	
1941年9月5日	コミンテルンは中共中央および中共南方局に宛ててそれぞれ30万ドル、都合60万ドル=420万元を送金 残りの40万ドル=280万元を送金できなかった可能性がある	

三〇万ドル、都合六〇万ドル(四二〇万元)を送金した。一〇月、コミンテルン本部は戦事で移転を余儀なくされ、残りの四〇万ドル(二八〇万元)を送金できなかった可能性がある。いまのところ、中共がそれを受け取ったことを示す証拠はない。

注

- (1) 陳永發「紅太陽下的罌粟花——阿片貿易与延安模式」『新史學』一卷四期、一九九〇年二月。
- (2) 台北・聯經出版、一九九八年。
- (3) The Yanan Way in Revolutionary China, Cambridge: Harvard University Press 小林弘二、加々美光行訳『延安革命』筑摩書房、一九七六年。
- (4) 四輯、蘭州・甘肅人民出版社、二二四頁。
- (5) 『陝甘寧革命根据地史料選輯』四三三七頁。
- (6) 『星光』二七、一八頁、二〇頁。
- (7) 前掲『陝甘寧革命根据地史料選輯』一輯、六九頁。
- (8) 政策転換の前夜、一九三六年七月に林伯渠は彭德懐に宛てた書簡で、辺区では七県のみがゲリラ状態に入っていないと述べている。すなわち七県では戦火は波及していないが、この七県は経済が疲弊して自給自足ができず、中共中央に財政援助を仰ぐほかないありさまであった。前掲『陝甘寧革命根据地史料選輯』五輯、六、七頁。
- (9) 李維漢『回憶与研究』北京・中共党史出版社、二〇一三年、三八〇、三八一頁。
- (10) 前掲『陝甘寧革命根据地史料選輯』五輯、六、七頁。
- (11) 前掲『陝甘寧革命根据地史料選輯』一輯、一三三頁。
- (12) 鉅款(大金)の金額は不明だが、中共がこれを重視していることから見て、巨額であったことは確かであろう。上海から延安に運んだのは毛沢東の弟毛沢民や銭之光辺区外貿易局長、危拱之、銭希均らである。西安か

らは林伯渠、葉劍英、陳賡らが護送に参加した(『中共党史人物伝』三九卷、二五頁)。

- (13) 前掲『陝甘寧革命根据地史料選輯』一輯、六六、六七、一三三頁。
- (14) 『星光』二三六、一三七頁。辺区財政庁によれば三八年の徴税は一・五万担、三九年の徴税は一・七万担(一担は、一〇〇斤=五〇〇グラム)であり、これは「史料」の数字と差が大きい。公糧のほかに中共は税金を徴した。三八年は法幣二七万円、三九年は五九万円であった。ただし税の性質は不詳。
- (15) 前掲『陝甘寧革命根据地史料選輯』六輯、四一頁、四五頁。
- (16) 前掲『陝甘寧革命根据地史料選輯』四輯、一七二頁。同上五輯、五三三頁。
- (17) 前掲『陝甘寧革命根据地史料選輯』四輯、一七二頁。
- (18) 前掲『陝甘寧革命根据地史料選輯』一輯、一頁。
- (19) 南漢宸は延安時代の最も重要な財經専門家だが、四七年に毛皮と甘草を移出できないと語っている。『陝甘寧史料』五卷二六頁。
- (20) 前掲『陝甘寧革命根据地史料選輯』四輯、五〇頁、七一、七二頁。
- (21) 『謝覺哉日記』人民出版社、一九八四年、二九六、二九七頁。
- (22) 前掲『陝甘寧革命根据地史料選輯』五輯、三五一頁。
- (23) 米国で一九二〇年代に禁酒法が作られたときにマフィアはこれを利用して大儲けした事例と酷似している。

第4期
2015
10月号

変革のための総合誌

情況

<戦後七〇年安倍談話——日韓条約五〇年>

林 哲 安倍首相の「戦後七〇年談話」について
日韓基本条約五〇年を経て——敗戦七〇年の視点から
仲尾宏・文泰勝・矢野秀喜・吉澤文寿
丸山茂樹 朴元淳ソウル市長の登場とGSEF「ソウル宣言」

<書評特集>

菅孝行『天皇制問題と日本精神史』
伊藤公雄・友常勉・伊多波宗周



深沢一夫 辺野古協議「決裂」——挫かれた安倍政権の二つの狙い
学生ハリスト実行委員会 ハンガーストライキ報告
矢沢国光 「米中二極体制」、その起源とゆくえ(上)